

第 1 回中国大学図書館担当者訪日交流感想文

招聘期間：2001 年 9 月 24 日～10 月 3 日

団長 南京大学 図書館副館長 馬 金川

団員 吉林大学 図書館副館長 陳 長生

団員 清華大学 図書館副研究員 孟 艷華

中国大学図書館担当者訪日団報告書

中国大学図書館担当者訪日団
団長 馬金川

日本財団の助成により、日本科学協会の招請を受け、中国国際友好聯絡会が組織した「中国大学図書館担当者訪日団」一行 11 名は、2001 年 9 月 24 日～10 月 3 日に、日本を訪問し、視察と交流を行った。

中国国際友好聯絡会からの応援と協力を受け、日本科学協会は、事前に細心に訪日団一行の日程を設定し、関係機関等に手配してくれた。そのお陰で、訪日期間を通じて訪問先々では細心周到な招待を受けることができた。訪日団は、日程に従い、順調に交流と視察を行い、日本各界から熱烈な歓迎を受けた。中日双方の交流は、非常に誠意が込められたものであり忌憚のない意見が交わされ、成果の大きいものであった。訪日団全員は、日本国民の友好的感情を自ら感受したと共に、日本の科学技術、歴史、文化、都市と農村の風貌、郷土人情などについての理解が深まり、受益が多かった。今回の交流は、非常に意義の深いものであったと心から理解した。今回の交流は、教育研究図書寄贈事業の促進は言うまでもなく、理解と友好を深めるというより深い意味での効果が得られ、中国の大学図書館と日本側との相互交流の道を広げるものとなった。

1. 訪日団の概要

(1) 日本財団、日本科学協会のトップへの表敬

訪日団は、日本で視察と交流をした期間に、終始、日本財団、日本科学協会のトップからの熱烈な招待と親しい歓迎を受けた。

日本財団曾野綾子会長、笹川陽平理事長、尾形常務理事、森田常務理事、そして日本科学協会濱田隆士理事長、梶原常務理事はそれぞれ訪日団全員と会見し、双方は友好的会談を行った。

曾野綾子会長は、中国のこと、そして中日交流の発展について深い関心をもたれている。曾野綾子会長は、「ここ 20 年来、中国はますます開放が進んでおり、中日交流も一層盛んになってきた。大学は、対外交流の先鋒だ。」と話した。そして曾野綾子会長は、作家という独特な視点から、「書籍が国境を超えて、全世界に行き渡り、本当に必要とする読者に届けられることと、読者が図書館から良い本を見つけるのを手助けすることは非常に有意義なことだ。」と話した。

笹川陽平理事長は、繁忙な日程から貴重な時間を割いて下さり、訪日団と会見した。笹川陽

平理事長は、「日本財団が日本各界の図書を中国大学図書館に寄贈する主旨は、中日間の民間交流を通じて図書情報を提供することにより、中日友好の発展を促進することにある。そして図書寄贈事業をより有効に行うため、図書の受入側の中国大学図書館から、図書寄贈事業についての意見を聞き入れ、図書寄贈事業の良い点と不足点についての真実の評価を聞きたい。」と真摯に述べられた。

尾形常務理事は、故笹川良一先生の、生前の「中日友好活動を行うように」との教えに言及した。尾形常務理事ご本人も中日間の民間交流を促進するために、「中国を数十回訪問した。図書寄贈事業が収めた今日の成果も笹川良一先生の教えに帰するところが大きい。」と話した。

濱田理事長は、「日本科学協会の事業活動の主旨は、日本国内の科学技術者と海外の科学技術者との相互協力を促進し、科学教育と文化の発展に尽くし、そして世界平和への貢献することである。」と述べた。また、「日本科学協会は、日本財団の全面的助成により、図書寄贈事業を実施している。」と指摘した。更に、「日本科学協会予算 5.7 億円のうち、1.2 億円以上が図書寄贈事業に使われていることは、日本財団が図書寄贈事業を非常に重視している証である。」と述べられた。

梶原常務理事は、「ここ3年間、日本における関連企業、大学、研究機関、出版社などから寄贈された図書が 27 万冊、そのうちの約 17 万冊を中国の大学に寄贈した。」と紹介した。

日本財団と日本科学協会のトップは、われわれの訪日交流に対して、以下のようなことを期待していた。

中日両国はそれぞれ違う文化を有しているが、中国大学の図書館担当者自身が、日本を訪問し、交流を行うことによって、日本の図書館事情がより深く理解され、図書寄贈事業の更なる発展につながる。また、図書寄贈事業を発端に人的交流、情報の交流にまで広げ、人・物・情報の交流を中心とした文化交流を行う。更に日本文化の基盤となる日本の一般市民の生活、自然、食文化、歴史、社会などに対する実地視察を通じて、多視点から日本文化を理解し、友好を促進するという目的に到達する。

訪日団長を務める南京大学教授馬金川は、訪日団全員を代表して日本財団と日本科学協会のトップの会見に感謝する意を表した。馬金川は、「図書寄贈事業は、図書を受けた大学にとって、日本語版蔵書の補充、先生と学生の図書からの科学技術、文化知識、そして情報の獲得、日本に対する理解には重要な役割を果たしている。そして訪日団が図書寄贈事業の実際の運営状況を理解し、日本の図書館の担当者達との対面交流を通じて日本の先進的経験を取り入れることは、非常に意義が深いことだと理解している。理解は、交流から始まり、交流の中から日本の文化、科学技術、社会に対する理解が深まり、相互理解と友好関係が強められる。」と話した。

(2) 図書館学、情報学のセミナー

中日大学図書館の担当者、寄贈事業の協力者、科学技術、文化などの各界の方々がセミナーに集った。濱田理事長は、「情報科学と図書情報」と題する基調講演をなされた。濱田理事長

は、一般定義における情報、情報の本質、流通途中における情報の変質、情報に対する処理と評価、そして紙メディアの一つである図書の現代における役割などについて興味深い見解を話した。

訪日団長馬金川教授は、「中国の高等教育における文献の保存と利用システム」と題する講演をなされた。ここ数年間における中国最大の大学図書館連盟の設立、発展、そして資源の共同建設と共同利用についての成果及び問題点を話した。

日本女子大学文学部田中功教授は、「大学図書館の電子化」を題とする講演をなされた。田中教授の講演は、日本の電子化の現状を紹介する日本の文部科学省の「大学図書館現状報告書」の1998年～2000年の数字を基に分析を行ったものである。図書館の電子化の進展に伴い、読者の情報の獲得方法には、従来の印刷媒体から根本的な変化が起った。読者には情報利用能力において差があるため、図書館は、インターネットによる情報の検索能力と活用能力を向上させるために読者をトレーニングする役割を果たす必要があると指摘した。

セミナーにおいて、参加者は、上記の三つの講演に対して濃厚な興味を示した。質疑応答も非常に活発に行なわれた。参加者達は、図書館のデジタル情報の製作方法、電子資料の有効利用、ネットワークに侵入するウィルスの危害、デジタル画像の視覚効果、資料の保存、古籍の修復などの問題について討論した。参加者達の思考は活発的であり、関心のある問題の領域は広いため、議論する時間は足りない程であった。参加者達は、これらの議論を晚餐会に持ちこみ、交流を更に深めていた。セミナーは大成功であった。

(3) 図書館界との交流

日本科学協会は、国立国会図書館、市川市中央図書館、歴史の深い東京大学附属図書館、明治大学の最新の図書館、私立大学の立命館大学図書館の視察を手配してくれた。これらの視察先は、それぞれの特徴があった。訪日団は、各図書館からの紹介を聞き、館内及び具体的な業務処理部門を見学した。そして読者に対するサービス、相談業務、デジタル情報の製作、蔵書の方針、図書館間の交流、音響と画像サービス、コンピュータ管理、ネット資源の共同利用、文献送達など多面にわたる視察と関係者との交流を行い、豊かな成果を取得した。

(4) 日本の自然、社会、歴史、文化に対する実地考察

訪日団は、丸善、生命の星・地球博物館、箱根美術館、武士の里美術館、大寿荘温泉、大涌谷、鈴廣博物館、海遊館、船の科学館、清水寺、金閣寺、太秦映画村を見学し、新幹線に乗り沿線の風景を満喫した。また、神田古書店街、皇居、銀座の街並みそして尼崎のディーゼルエンジン工場を見学した。

和食を味わい、茶道を体験し、日本庭園の「美」と「静」を感受し、そして大自然の賜りものである温泉に浸かり、火山噴煙の奇観を楽しんだ。カラオケのメロディーに陶醉し、大都会東京の繁華な夜景——「万家灯火」を見下ろした。青い海に曳航している巨大な船、晴れ渡る万里の晴天に昇る明月を遠くから見ていた。訪日団全員は、一衣帯水の隣国日本を、多角、多側面

から観察することができた。これほど科学技術が進歩し、秀麗な山河、独特な民情、豊かな生活を持つ国に日本を、作り上げた日本民族に対する理解が深まった。

2. 視察・見学後の感想

(1) 日本財団、日本学協会、及び図書寄贈事業

日本財団がモーターボート収益金の一部を海外協力助成事業に活用することは、非常に先見性と卓識の挙である。教育研究図書の有効利用事業(の運営)を日本科学協会に指定することも「明知の挙」である。科学研究と教育は大学の主な活動であり、科学技術、文化知識が掲載されている書籍は大学でフルに利用されている。図書寄贈を日本財団の国際協力事業の重要な事業の一つとして民間交流の形で教育と科学研究を促進し、最終的に中日国民間の相互理解と友好増進の目的に到達する主旨は、非常に意義深く、影響の大きいものである。日本財団のトップ自身が、中国大学図書館担当者訪日団の訪問を重要視してくれたことは、訪日団に非常に深い印象を残してくれた。

日本科学協会は、科学研究と教育の道を深く理解し、寄贈図書の収集、分類、事業の推進において非常に積極的でその成果は大きい。日本科学協会が中国大学図書館から図書に対する需給と選定についての意見を真摯に聞き入れることは、中国大学から広く歓迎され、賞賛された。中国国際友好連絡会の協力、日本財団助成、日本科学協会主催による「中国大学図書館担当者訪日交流事業」に係る学術セミナーの開催、図書館員の交流、情報交換、図書館視察、そして自然、社会、文化等の実地見学などは正に十分に考慮された意義深い大きな計画であり、中国大学図書館の意志に適した計画であると言える。訪日活動が大きな成功を収めたこともその主旨の正確さを証明したものである。これらは必ず中日両国の文化交流、そして友好の促進に将来にわたって良い影響を与える。

訪日団は、(日本側の)図書寄贈の全過程を考察した。丸善トランクルームの社員全員が玄関で列をなして訪日団を出迎えてくれた時は、顔に柔らかな春風が吹かれているような暖かさを感じることができた。丸善の社員達の作業時の真剣さ、責任感、厳密な作業姿勢は、訪日団員に図書寄贈の苦勞を理解させた。そして創文社、関西の図書提供者との懇談会を通じて、日本各界が積極的に図書寄贈に参加する情熱と友好的な感情を感受した。

(2) 日本図書館界に対する視察と日本図書館界との交流

‘どのようなタイプの図書館視察をすれば日本の図書館の全貌が分かるか’ 訪問先の手配を見て日本科学協会の能力がわかった。日本の図書館視察後の印象をまとめてみると、日本図書館は業務内容、顧客に対するサービス、自動化、データベース化等の面において中国の先進的の大学、及び大型図書館の水準に近いが、欧米先進国と比べてみるとデータベース化、及びIT応用面においてはまだ距離があると感じるられた。交流を通じて中日双方は、ITによる将来の図書館の発展性、データベース化、ネットワークの進展に伴って生じる問題、変革中にある図書館の対策に

対して、共通の興味を示し、ディスカッションは、活発で、参加者は強い共鳴を感じた。

(3) 日本の自然、社会、歴史、文化についての感想

日本は、山河秀麗な国である。植生被覆面積が広く、空気が新鮮で、心に安らぎを与えてくれる。日本での視察は、われわれの見聞を一新させてくれた。日本は、都市においても農村においても高度な現代化を実現した。交通が発達しており、秩序が整然としている。これらは、十分に日本の科学技術水準と経済の実力を示している。日本の歴史と文化は、中国の歴史と文化と、強い関係と融合がある。そのため、言語、文字、風土、人情、宗教、思想、歴史、建築、芸術、理念などの面においては、鮮明な民族的な特色を保持しながらも、中日両国の歴史的関係を示している。これらは、訪日団に親しさと生き生きとした印象を与えてくれた。

3. 訪日団の成果と体験

(1) 相互理解と友好往来を促進した

日本財団、日本科学協会、中国国際友好聯絡会の、中日民間における科学、技術、文化の交流を通じて中日友好関係を促進する英知、世界人民の友好関係構築に尽くす理念、そして緻密で周到な手配の風格は、訪日団一行に中日両国民の友情を感じさせてくれた。理解は、交流から始まり、交流は、理解を促進する。これはすでに双方の共同認識となっている。中日両国の間に歴史的に戦争の傷跡と怨恨があるにしても、歴史を認識し、教訓を忘れず、平和が人類にもたらす経済の繁栄と社会進歩を認識することは必要である。中日両国民が友好的に付き合い、共に世界の文明発展に寄与することこそ、世界平和と進歩の主流であると、人類の理性は教えてくれた。

美術と芸術の真・善・美、茶道という文化の「修身養性」、日本庭園の安静さと幽深さ、カラオケに込められた情緒、道を教える時の親切で熱心な案内者、そして生命起源に対する奥深く、新奇な敬畏と賛美、至るところで感じられた日本の学者、一般市民、各界人士の友好と善意は、日本国民の本当の資質を具現し、(われわれの)中日両国の世々代々の友好に対する信念を固めた。

(2) 図書館、博物館のような公益事業にある教育とサービスの理念

訪日団にとって最も収穫が大きかったことは、日本の公益事業が教育機能とサービスの理念を重要視しているということを深く理解できたことである。

生命の星・地球博物館は、県内の植物愛好者のボランティアによる植物の収集、標本の製作、植物誌の編纂を奨励している。鈴廣博物館は、来館者達に蒲鉾造りを教え、蒲鉾板の製作工芸展を開催している。海遊館は、海洋生物を観察に来る子供と学生が多く集った。市川市中央図書館は、ボランティアを組織して図書の開架と図書の修復を手伝ってもらっている。最も驚いたことは、ボランティアの方々が年間会費 1,000 円を自ら納めてまで手伝っているということである。このような方法を通じて若い世代に公益事業に献身する精神を育てている。児童館は、玩具を配置した建物の独特の設計、子供達に喜んで図書館に入ってもらうために工夫している。このことにより、子供たち

に遊びの中から学ばせ、小さい頃から自然と科学技術に対する興味を引き出し、更に図書館の利用方法を教える等の工夫を、我々は見習わなければならない。図書館は、体の不自由な方にも配慮をしている。東京大学の図書館には、目の不自由な方のための閲覧室があり、盲文図書だけではなく、PCの音声出力機もあり、目の不自由な方に朗読を聞かせている。各図書館にも、盲人用の道が敷設されている。図書館が全ての読者にサービスを提供するという理念は、サービス施設にも反映されている。東京大学図書館内には、アメリカとイギリスのテレビ番組が放送されるテレビを設置されている。中国のテレビチャンネルの開設も計画している。市川市中央図書館は、児童と老人のために画面のボタン操作によるOPACを設置している。コンピュータを使用できない人でも検索し、利用できるような様々な配慮をしている。明治大学は、大学図書館を社会に公開することを計画している。立命館大学は、学生達のインターネット利用の為に数百台のコンピュータを提供している。国立国会図書館は、全オープン式のサービスを提供している。教育は、子供から始まる、すべては、読者のためという理念、及び具体的措置は、訪日団全員に多くのヒントを与えてくれた。

(3) ハイテク、環境保護意識

訪日団は、日本に10日間滞在し、その間に数千キロの旅をした。沿路で林木蒼蒼、繁る植生が見られ、無垢な空気、洗ったような青空を享受した。ハイテクの生産においても環境保護を意識している。尼崎工場を見学した際に感じたのは、工場が顧客の要請に製品を設計し、環境保護機器を生産し、健康で豊かな社会作りに貢献することである。廃棄物の分類収集は、一般市民の支持と協力を受け、日本国民の環境保護意識を賞賛しなければならない。

日本は、自然と生存環境に必ずしも恵まれているとは言えない。地震、台風が多く、自然資源も豊かではない。長期にわたる自然災害との戦いの中において、日本国民は、自然を変える意志が強まり、自然と戦う能力が強くなった。経済を発展させると同時に、将来に向けて、環境に配慮し、環境を保護する日本国民の行動を尊敬しなければならない。高度成長における中国の現状と結びつけて考えると、環境への影響を憂慮せざるを得ない。一部の人々が目先の利益を追求するため、環境を犠牲する行為が度々発生する。中国において、環境保護の法律を整備し、環境についての教育を強化する必要がある。

(4) 一般市民の生活と文化についての体験

訪日団が日本の一般の民衆との短い接触を通じて、一般市民の生活水準と福祉水準が高いと感じた。

大寿荘温泉保養所では、古稀を超えた多くの老人達が我を忘れて歌ったり、踊ったりしている姿、そして大自然の賜りものである温泉に浸かり、美味しい和食、日本酒を味わう姿、日本の老人にとっては最高の幸せだと感じた。日本国民は、科学者から一般市民までカラオケが好きで、我々はカラオケの故郷の魅力を感じさせられた。歌の世界に浸り想像に身を任せている歌い手の姿は忘れがたい。

10月1日は、中国の国慶節と中秋節である。尾形常務理事は、わざわざ月見ができる楼台に宴

を設けてくれた。主人と賓客は、共に杯を交わし、明月を觀賞しているうちに、万里遠ざかる異国他郷に身を置かれていることを忘れ、濃厚な人間味が席上に溢れていた。旅館の客間では日本の学生達の優雅な花道芸術を鑑賞した。夜は、丁度近くの神社で豊作を祝う祭りがあり、日本国民の伝統的文化を重視する姿勢を伺うことができた。これこそ、高度な現代化都会のもう一つの側面である。日本民族が賓客を迎える礼儀は、中国のそれとは差異が大きい。まちの本屋には、漫画、動画、VCDなどの現代技術と古代神話が混合し、それがうまく調和しており、日本文化の多様性を伺わせた。東京大学の正門にアメリカを支援するための日本の自衛隊派遣に反対するスローガンが貼られていたことも考えさせられた。

4. 未来を展望し、発展する空間が広し

訪日団は、「馬に乗って花をみた」だけで、日本滞在中の見聞は、限られたものであり、日本に対する理解も浅いものである。日本全体に対する理解には、まだ時間がかかる。長期的な友好関係の維持と強化は、中日両国の有識の士が協力しあって初めて実現できるものである。社会制度と文化の差異は障害とはならない。同じアジアに位置する二つの国の友好関係は、両国民、そしてアジアと世界の平和と発展に挙足の影響がある。

訪日団は、図書館事業の視点から教育図書有効利用事業に対する自信に満ちている。中国大学の図書館は、日本の人文科学の図書館蔵書に対する補充について、それぞれの需要がある。特に科学技術に関する図書については、時代遅れではないものがほしいとの要望がある。訪日団は、中国大学図書館にある豊富な中国歴史文化の文献資源についても十分に日本の図書館界と交流し、共有することができる。この方面については広く発展させるの可能性がある。図書館のデータベース化、ネットワークの進展に伴ない、時間と空間を超えての資源共有には、非常に有望な将来性がある。

中国の大学は、対外交流の先鋒として中日文化交流の掛け橋としての役割を果たすことができると自負している。中日間の相互理解と友好増進の事業において中堅的な役割を果たしていきたい。

2001年10月12日

視察と交流を語る

——中国大学図書館担当者訪日団随后感想

吉林大学図書館副館長、助教授 陳 長生

1. 日本への旅立ち

日本財団の助成により日本科学協会の招請を受け、そして中国国際友好聯絡会の支持と協力を得て日本を訪問し、視察と交流に参加する機会に恵まれた。

2001年9月24日に、山を越え、海を越えて私を乗せた飛行機が日本の成田空港に着陸した。しばらく待ったら呼び声が聞こえた。出迎えにきてくれた日本科学協会の顧文君女史と梶原常務理事、宮内女史であった(顧文君先生とは既に2回会ったことがある)。われわれを乗せた車は、東京に向かった。美しい都市、晴朗な空があるにもかかわらず、異国他郷に身が置かれている感覚が湧いてきた。

2. 日本での滞在

海を越えた異国他郷に待っているのは見知らず、或いは孤独ではなく熱を込め、バランスがとれた友好である。視察と交流の期間に、日本の各界はわれわれを熱烈な歓迎で受け入れてくれた。終始、日本財団、日本科学協会のトップからの心を込めた接待と親切な配慮を受けていた。日本財団の曾野会長、笹川理事長、尾形常務理事と森田常務理事、日本科学協会の濱田理事長、梶原常務理事等の方々はわれわれ会見してくれ、友好的な会談を行った。曾野会長は、作家という彼女の独特な視点から、「書籍は国境がないものであり、書籍がそれぞれの国に伝わり、本当に図書を必要とする読者に送ることも良い交流である。図書館が読者を手伝って良い本を見つけることは非常に有意義なことだ。」と述べられた。笹川理事長は、中日間の交流の発展を非常に重視されている。笹川理事長は、「日本財団が日本各界から集めた図書を中国の大学に寄贈することを助成する宗旨は、中日間の民間交流を通じて新しい情報を提供し、中日友好の発展を促進することにある。」と述べられた。そして「中国の発展は日進月歩であり、非常に変化が大きい。中国の大学図書館からも図書寄贈についての意見を是非聞かせていただき、図書を寄贈する事業の良いところと不足点を正しく評価して「教育・研究図書の有効活用」事業をよりよく進めたい。」と希望を述べられた。

10月1日は、中国の国慶節と中秋が重なった日であった。尾形常務理事はわざわざ宴会を設けてわれわれと一緒に名月を観賞した。万里を離れた異国に身が置かれていることを忘れさせ、その濃厚な人情は席上に溢れていた。尾形常務理事は、故笹川良一先生から「中日友好を促進しよう」と教えられたことを話してくれた。尾形常務理事が中日間の民間友好事業を促進するために中国を何度も訪問したこと、そして「図書寄贈事業が今日のような成果が得られたことも、故笹川良一先生の教えが深く関わっている。」と述べられた。

濱田理事長は、「情報科学と図書情報」と題する基調講演の中で、情報の本質、伝達の過程における情報の変質、情報に対する処理と評価、特に紙を主媒体とする図書の現代において果たす役割について非常に興味深い見解を示し、非常に有益なお話を伺うことができた。濱田理事長か

ら 1999 年 7 月から実施した「教育・研究図書の有効活用」事業の説明を濱田理事長から受け、われわれは日本科学協会の事業宗旨をより良く理解することができた。梶原常務理事はここ3年間における日本の企業、大学、研究機関、出版社からの図書の寄贈状況を紹介してくれた。これらの部門から合計約 17 万冊の図書が中国の大学に寄贈された。

南京大学図書館馬金川教授は、訪日団全員を代表して日本財団と日本科学協会の責任者の会見に感謝した後、「中国における大学図書館の情報システム」を題とする報告を行った。日本女子大学教授田中功先生は、「図書館の電子化の現状」を題とする報告を行った。田中先生は報告の中で「図書館の電子化の進展に伴い、読者が情報を獲得する方法は、すでに従来の印刷媒体から根本的な変化を起している。読者の中には情報の利用能力の差が存在しているが、図書館は読者のインターネットによる情報検索と利用の能力を高めるために重要な役割を果たすべきだ」と主張した。

セミナーの参加者達は、上記の三つの報告に対して濃厚な興味を示した。図書館がデータ・ベースを作る方法、電子資料の利用、ウィルスがインターネットにもたらす危害、パソコン画像の視覚効果、資料の保存、古本の修復などについて討論し、有意義な質疑応答であった。

日本科学協会は、日本の代表的な図書館である国立国会図書館、歴史の古い東京大学図書館、明治大学図書館新館、市川市中央図書館、立命館大学図書館を案内してくれた。われわれは各図書館についての紹介を聞き、図書館館舎を見学した。読者に対するサービス、データ・ベースの製作、蔵書についての考え方、図書館間の交流、音声と画像サービスの提供、パソコンによる管理、インターネット資源の共有、文献の伝送等について意見を交換し、非常に収穫が多かった。

その他に、日本科学協会の手配により、われわれは生命の星・地球博物館、鈴広博物館、海遊館、船の科学館、武士の里美術館、箱根美術館、丸善(株)などを見学した。

大寿荘、大涌谷、清水寺、金閣寺、太秦映画村、神田古書店外街、ヤンマーディーゼル尼崎工場を見学した。新幹線に乗って沿線の風景に満喫した。和食を味わい、茶道も体験し、日本庭園の美しさ、静けさを享受した。大自然の恩恵である温泉に浸かりながら地下からの噴煙を驚嘆した。

カラオケ、東京の夜景、京都の静かな雰囲気、大阪の活気、箱根の古跡、青い海と空の間に曳航する船、万里の晴天に一輪の名月、われわれはこれらに陶醉した。

3. 日本の思い出

日本人の仕事に対する姿勢は有名である。図書寄贈事業は順調に進められ、訪日団の日程が順調に運んだことも日本科学協会の責任者及び職員達の仕事に対する姿勢とは切り離すことはできない。訪日団の今回の視察と交流は、日本科学協会のトップ及び顧文君女史が工夫を重ね、細心に日程を組んでくれたものである。訪日前から日本滞在中まで大変お世話になった。訪日団の訪日日程が非常に順調に進められたことも日本科学協会の仕事の成果である。われわれは、図書寄贈の全過程を視察した。丸善社社員全員からの出迎えは非常に心暖かく感じられた。丸善(株)の

従業員達は、非常にまじめで真剣で責任感があり、ミスがなく秩序のある姿勢は、われわれの図書寄贈事業に対する理解と認識を深めた。

教育へのサービス理念から市川市立図書館ではボランティアを募集して図書の開架と修復を行う場合、ボランティア自身が1000円の会費を納めなければならない。児童館の建物は玩具のようにデザインされて子供達が楽しく図書館を利用できるよう工夫されている。東京大学図書館には盲人閲覧室が設けられており、点字図書館だけではなく、音声による目の不自由な方のための朗読がある。すべての図書館は眼の不自由な方にとってバリアフリーである。図書館は身体の不自由な方のために便宜を図り、すべての読者のためという理念は図書館管理のすべてに貫かれている。

総じて今回の訪日は受益が多かったと言える。特に日本の科学技術、歴史、文化、都市と農村の風貌、風土人情などについての理解を深めた。従って今回の訪日交流は、非常に意義の深いものとなった。教育・研究図書の有効活用事業を促進しただけではなく、相互理解と友好の促進といったより高い次元の効果が得られ、大学図書館間の幅広い交流のために広い路を切り開いた。

時の流れは水の如く、歳月の流れは梭の如くと言われている。帰国してもう一ヶ月になるが、この一ヶ月間に日本を訪問した時の場面を絶えず思い出し、その味わいは飽きることなく私の脳裏に焼きついている。

忘れがたしー「日中図書館情報サービス」セミナーの席上での積極的で熱烈的な討論、飛躍的な発想、興味深い発表

忘れがたしー丸善(株)を見学した時に従業員全員から熱烈的な歓迎を受けた暖かい感動、日本各界が積極的に図書寄贈に参加する友情

忘れがたしー 図書館、博物館、工場を見学した時の相互交流の場面

忘れがたしー 日本科学協会の周到的な手配により独特な蒲鉾作りの場面を経験させてくれたこと、さまざまな日本料理、そして和食に慣れないことを配慮してわざわざ中華料理を用意してくれた心遣い、しかも日本人が作った中華料理を評価してもらいたいような工夫

忘れがたしー 尼崎の工場を見学した時芝生で労働者達と記念撮影をしたこと、そして日本の工場が生産と同時に環境保護を重要視していること、管理レベルが高いことに対する深い印象

忘れがたしー 大寿荘で古希を超えた老人達がわれを忘れて踊ったり、歌ったりする場面;われわれはそこで大自然の賜りものである温泉に浸かり、美味しい和食と美酒を味わいながら老人達との交流した

忘れがたしー カラオケの故郷の魅力(歌っている人が自分の歌に心身没入している場面、特に濱田理事長の歌声がなかなか忘れがたい。)

忘れがたしー中国の国慶節と中秋節が重なった10月1日に尾形常務理事がわれわれのために名月を觀賞する楼台で宴会を設けてくれたこと、われわれは一緒に一輪の名月の下で杯を交わし、万里を離れた異国他郷に身を置き、濃厚な人情が溢れていることを感じたこと。尾形常務理事は笑い声が途絶えず、しきりに杯を挙げてわれ

われと一緒に忘れがたい中秋の夜を過ごしたこと；
忘れがたし— 梶原常務理事が終始訪日団の日程に心を配ってくれたこと。入国した日から滞在中の見学、空港での見送りなど、非常に骨を折ってくれたこと
忘れがたし— 日本滞在中宮内女史が終始われわれのために周到に手配してくれた苦勞と共に写真にたくさんの思い出を作ってくれたこと
訪日中の視察と交流のすべての場面は、いつも昨日のこのように蘇ってくる。ここで視察と交流の感想を文章にするが、再び日本を訪問し、旧友と再会する機会があれば更にまた交流を続けたい。

視察と交流を語る

——中国大学図書館担当者訪日団随后感想

吉林大学図書館副館長、助教授 陳 長生

1. 日本への旅立ち

日本財団の助成により日本科学協会の招請を受け、そして中国国際友好聯絡会の支持と協力を得て日本を訪問し、視察と交流に参加する機会に恵まれた。

2001年9月24日に、山を越え、海を越えて私を乗せた飛行機が日本の成田空港に着陸した。しばらく待ったら呼び声が聞こえた。出迎えにきてくれた日本科学協会の顧文君女史と梶原常務理事、宮内女史であった（顧文君先生とは既に2回会ったことがある）。われわれを乗せた車は、東京に向かった。美しい都市、晴朗な空があるにもかかわらず、異国他郷に身が置かれている感覚が湧いてきた。

2. 日本での滞在

海を越えた異国他郷に待っているのは見知らず、或いは孤独ではなく熱を込め、バランスがとれた友好である。視察と交流の期間に、日本の各界はわれわれを熱烈な歓迎で受け入れてくれた。終始、日本財団、日本科学協会のトップからの心を込めた接待と親切な配慮を受けていた。日本

財団の曾野会長、笹川理事長、尾形常務理事と森田常務理事、日本科学協会の濱田理事長、梶原常務理事等の方々はわれわれ会見してくれ、友好的な会談を行った。曾野会長は、作家という彼女の独特な視点から、「書籍は国境がないものであり、書籍がそれぞれの国に伝わり、本当に図書を必要とする読者に送ることも良い交流である。図書館が読者を手伝って良い本を見つけることは非常に有意義なことだ。」と述べられた。笹川理事長は、中日間の交流の発展を非常に重視されている。笹川理事長は、「日本財団が日本各界から集めた図書を中国の大学に寄贈することを助成する宗旨は、中日間の民間交流を通じて新しい情報を提供し、中日友好の発展を促進することにある。」と述べられた。そして「中国の発展は日進月歩であり、非常に変化が大きい。中国の大学図書館からも図書寄贈についての意見を是非聞かせていただき、図書を寄贈する事業の良いところと不足点を正しく評価して「教育・研究図書の有効活用」事業をよりよく進めたい。」と希望を述べられた。

10月1日は、中国の国慶節と中秋が重なった日であった。尾形常務理事はわざわざ宴会を設けてわれわれと一緒に名月を観賞した。万里を離れた異国に身が置かれていることを忘れさせ、その濃厚な人情は席上に溢れていた。尾形常務理事は、故笹川良一先生から「中日友好を促進しよう」と教えられたことを話してくれた。尾形常務理事が中日間の民間友好事業を促進するために中国を何度も訪問したこと、そして「図書寄贈事業が今日のような成果が得られたことも、故笹川良一先生の教えが深く関わっている。」と述べられた。

濱田理事長は、「情報科学と図書情報」と題する基調講演の中で、情報の本質、伝達の過程における情報の変質、情報に対する処理と評価、特に紙を主媒体とする図書の現代において果たす役割について非常に興味深い見解を示し、非常に有益なお話を伺うことができた。濱田理事長から1999年7月から実施した「教育・研究図書の有効活用」事業の説明を濱田理事長から受け、われわれは日本科学協会の事業宗旨をより良く理解することができた。梶原常務理事はここ3年間における日本の企業、大学、研究機関、出版社からの図書の寄贈状況を紹介してくれた。これらの部門から合計約17万冊の図書が中国の大学に寄贈された。

南京大学図書館馬金川教授は、訪日団全員を代表して日本財団と日本科学協会の責任者の会見に感謝した後、「中国における大学図書館の情報システム」を題とする報告を行った。日本女子大学教授田中功先生は、「図書館の電子化の現状」を題とする報告を行った。田中先生は報告の中で「図書館の電子化の進展に伴い、読者が情報を獲得する方法は、すでに従来の印刷媒体から根本的な変化を起している。読者の中には情報の利用能力の差が存在しているが、図書館は読者のインターネットによる情報検索と利用の能力を高めるために重要な役割を果たすべきだ」と主張した。

セミナーの参加者達は、上記の三つの報告に対して濃厚な興味を示した。図書館がデータ・ベースを作る方法、電子資料の利用、ウィルスがインターネットにもたらす危害、パソコン画像の視覚効果、資料の保存、古本の修復などについて討論し、有意義な質疑応答であった。

日本科学協会は、日本の代表的な図書館である国立国会図書館、歴史の古い東京大学図書館、明治大学図書館新館、市川市中央図書館、立命館大学図書館を案内してくれた。われわれは各

図書館についての紹介を聞き、図書館館舎を見学した。読者に対するサービス、データ・ベースの製作、蔵書についての考え方、図書館間の交流、音声と画像サービスの提供、パソコンによる管理、インターネット資源の共有、文献の伝送等について意見を交換し、非常に収穫が多かった。

その他に、日本科学協会の手配により、われわれは生命の星・地球博物館、鈴広博物館、海遊館、船の科学館、武士の里美術館、箱根美術館、丸善株などを見学した。

大寿荘、大涌谷、清水寺、金閣寺、太秦映画村、神田古書店外街、ヤンマーディーゼル尼崎工場を見学した。新幹線に乗って沿線の風景に満喫した。和食を味わい、茶道も体験し、日本庭園の美しさ、静けさを享受した。大自然の恩恵である温泉に浸かりながら地下からの噴煙を驚嘆した。

カラオケ、東京の夜景、京都の静かな雰囲気、大阪の活気、箱根の古跡、青い海と空の間に曳航する船、万里の晴天に一輪の名月、われわれはこれらに陶醉した。

3. 日本の思い出

日本人の仕事に対する姿勢は有名である。図書寄贈事業は順調に進められ、訪日団の日程が順調に運んだことも日本科学協会の責任者及び職員達の仕事に対する姿勢とは切り離すことはできない。訪日団の今回の視察と交流は、日本科学協会のトップ及び顧文君女史が工夫を重ね、細心に日程を組んでくれたものである。訪日前から日本滞在中まで大変お世話になった。訪日団の訪日日程が非常に順調に進められたことも日本科学協会の仕事の成果である。われわれは、図書寄贈の全過程を視察した。丸善社社員全員からの出迎えは非常に心暖かく感じられた。丸善株の従業員達は、非常にまじめで真剣で責任感があり、ミスがなく秩序のある姿勢は、われわれの図書寄贈事業に対する理解と認識を深めた。

教育へのサービス理念から市川市立図書館ではボランティアを募集して図書の開架と修復を行う場合、ボランティア自身が1000円の会費を納めなければならない。児童館の建物は玩具のようにデザインされて子供達が楽しく図書館を利用できるよう工夫されている。東京大学図書館には盲人閲覧室が設けられており、点字図書館だけではなく、音声による目の不自由な方のための朗読がある。すべての図書館は眼の不自由な方にとってバリアフリーである。図書館は身体の不自由な方のために便宜を図り、すべての読者のためという理念は図書館管理のすべてに貫かれている。

総じて今回の訪日は受益が多かったと言える。特に日本の科学技術、歴史、文化、都市と農村の風貌、風土人情などについての理解を深めた。従って今回の訪日交流は、非常に意義の深いものとなった。教育・研究図書の有効活用事業を促進しただけではなく、相互理解と友好の促進といったより高い次元の効果が得られ、大学図書館間の幅広い交流のために広い路を切り開いた。

時の流れは水の如く、歳月の流れは梭の如くと言われている。帰国してもう一ヶ月になるが、この一ヶ月間に日本を訪問した時の場面を絶えず思い出し、その味わいは飽きることなく私の脳裏に焼きついている。

忘れがたしー「日中図書館情報サービス」セミナーの席上での積極的で熱烈な討論、飛躍的な

発想、興味深い発表

忘れがたしー 丸善(株)を見学した時に従業員全員から熱烈な歓迎を受けた暖かい感動、日本各界が積極的に図書寄贈に参加する友情

忘れがたしー 図書館、博物館、工場を見学した時の相互交流の場面

忘れがたしー 日本科学協会の周到な手配により独特な蒲鉾作りの場面を経験させてくれたこと、さまざまな日本料理、そして和食に慣れないことを配慮してわざわざ中華料理を用意してくれた心遣い、しかも日本人が作った中華料理を評価してもらいたいような工夫

忘れがたしー 尼崎の工場を見学した時芝生で労働者達と記念撮影をしたこと、そして日本の工場が生産と同時に環境保護を重要視していること、管理レベルが高いことに対する深い印象

忘れがたしー 大寿荘で古希を超えた老人達がわれを忘れて踊ったり、歌ったりする場面;われわれはそこで大自然の賜りものである温泉に浸かり、美味しい和食と美酒を味わいながら老人達との交流した

忘れがたしー カラオケの故郷の魅力(歌っている人が自分の歌に心身没入している場面、特に濱田理事長の歌声がなかなか忘れがたい。)

忘れがたしー中国の国慶節と中秋節が重なった10月1日に尾形常務理事がわれわれのために名月を觀賞する楼台で宴会を設けてくれたこと、われわれは一緒に一輪の名月の下で杯を交わし、万里を離れた異国他郷に身を置き、濃厚な人情が溢れていることを感じたこと。尾形常務理事は笑い声が途絶えず、しきりに杯を挙げてわれわれと一緒に忘れがたい中秋の夜を過ごしたこと;

忘れがたしー 梶原常務理事が終始訪日団の日程に心を配ってくれたこと。入国した日から滞在中の見学、空港での見送りなど、非常に骨を折ってくれたこと

忘れがたしー 日本滞在中宮内女史が終始われわれのために周到に手配してくれた苦勞と共に写真にたくさんの思い出を作ってくれたこと

訪日中の視察と交流のすべての場面は、いつも昨日のこのように蘇ってくる。ここで視察と交流の感想を文章にするが、再び日本を訪問し、旧友と再会する機会があれば更にまた交流を続けたい。